泉州国際市民マラソン
第9回大会 2002年（平成14年）

SENSHU INTERNATIONAL CITY MARATHON THE 9th CONVENTIONS

2月17日（日）

天　　候：曇り
気　　温：11℃
参加者数：2,987人
完走者数：2,334人
沿道人数：39万人

前回変更された新コースは、おおむね評判がよく、33km過ぎてからの二つの橋を越える“心臓破りの陸橋”で真価が問われる魅力的？なコースである。フィニッシュ間近で熾烈な争いが繰り広げられ、スタミナ切れでの上り下りはタフネスなマラソンコースであるといえる。

今回の招待選手の中で注目されたのは、シドニーオリンピック代表の川嶋伸次（旭化成）と、99年以来2度目の谷川真理（アミノバイタル）らで、海外姉妹都市からの招待、全国の市民マラソンの優勝者らがしのぎを削った。恒例となった岸和田市内でのだんじり囃子の応援が、今年も3000人のランナーを元気づけた。

男子は福原博充（大塚製薬）が終始先頭を走っていた植松翼（山陽特殊製鋼）を42kmキロ地点でとらえ、ゴール寸前で大逆転する結果となった。期待された川嶋は40kmまで先行したが3位に終わった。

女子は先行する谷川真理をとらえた吉備路マラソン招待の松本晴美がフィニッシュ前のデッドヒートを制し、11秒の差をつけて逆転優勝した。松本はレース途中2度のロスタイムを挽回しての優勝であった。

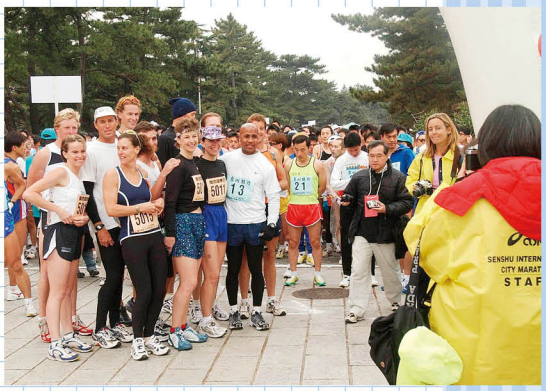
また、後半の小雨をついて、今回で277回目のフルマラソン完走となる山田敬蔵（74歳）は3時間32分28秒で快走し、名実ともに“鉄人ランナー”として元気なところを見せた。第1回から“皆勤賞”の高石ともやも、還暦祝いの激走を披露した。

第7回大会より、ヌーサマラソンがハーフマラソンとなったため、クイーンズランド州の「ゴールドコーストマラソン」との友好マラソン提携が行われていたが、この年、陸上競技協会レベルでの提携調印が交わされた。

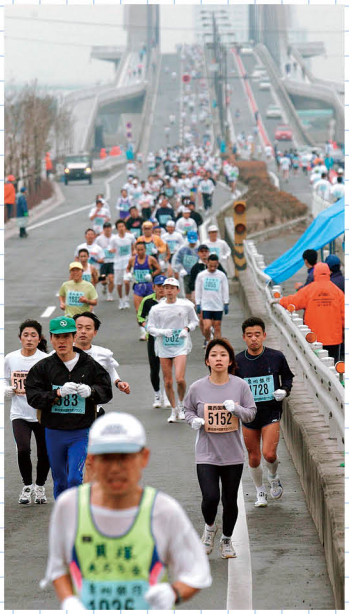
大会前日のレセプションで招待選手が勢揃い

レース開始前、ファンファーレを奏でる高石市民音楽団

ランナーに声援を送る貝塚市立西小の児童ら（貝塚市で）



レース開始前、記念撮影する外国人ランナーたち



田尻スカイブリッジを渡りゴールを目指すランナー（田尻町）

2002年（平成14年）2月18日（月曜日）

泉州国際市民マラソン

3000人小雨つき快走

軽やかな吹奏楽 雰囲気盛り上げ

○…スタートとゴール地点は、「初日の出」の高石市国営高石荘前（中国新聞）と泉佐野市佐野中吹奏楽部（同）。吹奏楽部員は、「能勢の年」、川端実作曲「能勢、それぞれ軽やかな吹奏楽を捧げ、雰囲気を盛り上げた。スタートの長寿寺公園（堺市）では高石市民音楽団の約三十人が、大会テーマ曲「負けない心」をアレンジした曲を演奏。ランナーを送り出した。

○…ゴールでは各所で吹奏楽が響き、ゴールの瞬間、ラッパ、ドラムなどを鳴らして、「ゴール！」と歓迎した。

○…レース中盤（二十三キロ地点付近）の貝塚市の脇浜交差点では、同市立西小の児童ら約三百人が、「頑張って走る」と声援を送った。

○…岸和田市本町の岸和田だんじり会館前では、だんじり好きの若手有志でつくる「岸和田だんじ会」（岸和田市）が太鼓や笛、カネなどの鳴り物で応援した。ちょうどゴールの中間点付近で、「一番しんどい所でしょうから、太鼓の音で勇気づけたい」と会長の迎井成之さん（23）。正午過ぎ、トップの選手が現れると、「来た、来た！」のかけ声とともに、「チンキチ」にも一段と熱がこもり、メンバーの松阪広太さん（21）は、「来年は太鼓のリズムたのって、走るのもいいかも。」

児童の父親の参加がきっかけで、「参加賞で疲れが出はじめる中、ランナーに元気を」と初めて応援に参加。前回大会まで最高齢で連続出場した杉山政雄さん（74）（泉佐野市）と、孫娘さん（9）（泉佐野市）と一緒に、「頑張れ」と声を掛け合った。

四年四組の児童二十五人がゴールが近くでいるなと、喜び合う笑顔を送り、次々と通過するランナーとタッチを交わしながら、熱い声援を送った。

完走者の結果は、http://www.yomiuri.co.jp/osaka-event/で。

一斉にスタートするランナーたち（17日午前11時、堺市の長寿寺公園で、本社ヘリから）

熟年ランナー今年も健在

最高齢74歳・山田さん

1日でも長く走る

山田さんは、この日がセンチュリー（百歳）になって三度目のマラソン。十三歳の時、九五二年に第一回ボストンマラソンで優勝し、金メダル四二・五キロ。「いくつになっても走りつづけることができた。この年でも走れる。この年になったら、これまでの後の支えになった。これまでは自己ベスト」と気迫を見せた。

今大会最高齢の山田敬蔵さん。元気に完走した

マラソンを始めたのは一九五一年。フルマラソン完走は今回を含め三百七十七回。「お世話になった方へのお礼の気持ちを込めて、一日でも長く走ること。人の生きたいとする決意を込める。」

一日一千メートルのランニングを欠かさない。四月にはボストンマラソンに挑戦する。選考八回目。これを十回に伸ばすのが夢だ。「一歩一歩は力なり。積み重ねた上にもまた積み重ねていく。マラソンは人生そのもの。まだまだ頑張ります」と話した。

還暦・高石ともやさん

疲れ知らず「来年も」

スタート前の高石ともやさん。声援にこたえる

高石さんは、「お月前に遍さんと声をかけられ、楽しくなった。」と、ゼッケンを付けたTシャツに短パン姿でスタートラインに登場し、市民から熱い拍手を受けた。年齢を感じさせない力強い走り。七時間三分44秒、中高年ランナーの仲間になった。「後半に降り出したるよう出場しつづけたい。雨もあまり気にならず、と思っても来年の投資を踏まえ、いつもご苦労ていた。

2002年（平成14年）2月18日付朝刊

優勝
第9回大会

男子 大塚製薬 福原博充

女子 吉備路マラソン代表 松本晴美